# 絵姿女房と難題女房

三浦俊介

日本の昔話の中に「ある男の許に嫁した女房の美しいことを知った殿様が、その女房に横恋慕をし横取りしようとして男に難題を課すが、男は女房の持つ不思議な力や宝物によってその難題を解決する」という展開を持つものがいくつかある。「絵姿女房（難題女房型）」[1]「竜宮女房」「笛吹聟」などがそれに当たるが、今日までに報告されているそれらの昔話の類話の中に、柳田国男氏の『日本昔話名彙』（以下『名彙』と略す）や関敬吾氏の『日本昔話大成』（以下『大成』と略す）の話型分類から外れるものが二話型ある。その一つが、息子が病気の母親に孝養を尽くすという独自の発端を持つ「観音女房」[2]であるが、これは稲田浩二氏の『日本昔話通観』（以下『通観』と略す）の「昔話タイプ・インデックス」には登録されている。しかし、もう一つの、「絵姿女房」と全体的な展開はよく似ていながら、「絵姿女房」に必須の「美しい女房の絵が風で殿様のもとへ飛ばされる」というモチーフ（以下「絵姿モチーフ」と称す）が欠落している昔話は、『通観』にも挙がっていない。これらの昔話は全て、AT465「美しい妻のために虐げられる男」をモチーフとして持っており、美しき「女房」ゆえに「難題」が課せられるのであるから、「難題女房譚」という話群として捉えることができる。

本稿は、「難題女房譚」という話群設定のもとに、「絵姿女房（難題女房型）」をめぐる問題について考察するものである。

## 一

従来「絵姿女房（難題女房型）」として分類されている類話の中に絵姿モチーフのないものが存在するということについては以前指摘したことがある。[3]そこで報告したその型の昔話は二十例であったが、本稿では、その中でも典型的なものとして、遠野市綾織町日影の語り[4]を例話として取り上げて、検討してみたい。

昔、昔、綾織の大久保に、とっても正直な若ぇ男あったど。あっとぎのごど、一人の女来て、「こっつの家さ泊めでけで」どしぇったど。

「おれみでぇな貧乏者の家さ泊ったって、良えごど無えんだが、外さ泊ってげ」どしぇったら、その女ぁ、

「私稼ぐがら、女房にすて使ってけで」どしぇったど。なんぼ断ってもわがねがったど。そんで泊めるごどにすて、女房にすたど。すてる内に、なじょな張り合なんだが、だんだん暮すが良ぐなったど。とごろぁ、そのごど殿様の耳に入ったど。

「その夫婦者お城さ連れで来」どしぇったど。そんで夫婦すてお城さ上がったど。すたば殿様ぁ、その女よがって、

「帰りに女ば置えでげ」どしぇったど。そんで正直は若な者ぁ、

「それはあ、本人次第で」どしぇったら、女ぁ、

「なんぼ殿様でも、そんたなごど無ぇんだ」って帰ったど。すたばお城がら使え来て、

「女房お城さよごすねんだら、お前の命取る。それやんたがったら、灰縄千尋なって来い」どしぇったど。正直な若ぇ者ぁ困って思案すてらば、女房ぁそれ聞いで、

「なあに、そんたなごど造作もねぇ、お前さんまんつ縄千尋なってげぇ」どしぇったど。そすて千尋の縄なったのさ火つけで焼えだど。すて、焼げだ縄お城さ持って行ったど。殿様ぁ、

「うん、なるほどこれぁ灰の縄だ」どしぇったど。すたば、まだのお城がら使え来たど。

「打たん鼓に鳴る鼓、ひょうひょうつづにそりはらえどいう物出せ」って来たど。そんで正直な若ぇ者ぁ、まだの思案すてらば、女房それ聞いで、

「なあに、そんたなごど、少す危ねぇども造作もねぇ」って、女房ぁ、厚つづれっコ着て綱かぶって、

「私、蜂えっぺぇおせで来っから、お前さんは、太鼓拵ぇでけで、太鼓は樽さ紙巻で、皮の代りに紙貼ってけど」どしぇったど。すてがら、えっぺぇ蜂たがってら巣持って来て、太鼓の中さ入れで紙貼ったど。正直な若ぇ者ぁ、女房に教られだよんにすて、つづれっコ着て、頭さば綱かぶって、その太鼓お城さ持ってったど。すて、殿様の前さ通されたど。そんどぎ、太鼓ゴロゴロっと、ころばすたど。打だ無くてもブーンブーンって蜂騒えで鳴ったど。今度ぁ、小刀で紙さ穴明げだど。すたば蜂ぁ、その穴っコがら出はってて、殿様だの家来だの、刺すまぐったど。すて、

「これぁ、打たん鼓に鳴る鼓、ひょうひょうつづにそりはらえどいう物だ」って、大っきな声でしぇったど。殿様はぁ、謝ったど。ドンドハレ。（傍線、稿者）

この例話は、「押し掛け女房」「殿様の横恋慕」「難題とその解決」などのモチーフによって構成されており、昔話の話型として『名彙』の「絵姿女房」に該当する旨が注記してある。それは『大成』における「絵姿女房（難題女房型）」に相当するものであるが、本文の傍線部、「殿様が女房に横恋慕する契機」となる部分に肝心の絵姿モチーフはなく、殿様の横恋慕は美しい女房の評判を聞いて起こったことになっている。

「絵姿女房」という昔話は絵姿モチーフがあるからこそ「絵姿女房」なのだから、話型成立に不可欠なそのモチーフを欠いているこの例話は「絵姿女房」と呼ぶべきではない。この昔話が（「絵姿女房」でなく）「殿様の難題」という題で報告されているのもそうした配慮からであろうし、『通観』第三巻が例話を「絵姿女房――難

題型」の（類話でなく）参考話としているのも同じ理由からであろう。

前稿[5]でも述べたように、絵姿モチーフのない「絵姿女房（難題女房型）」は、厳密な意味では「絵姿女房」ではないが、従来の分類では展開上最もよく似ている「絵姿女房（難題女房型）」として捉えざるを得なかったのである。稿者も前稿では、絵姿モチーフがなく評判によって殿様が横恋慕する昔話をも「絵姿女房（難題女房型）」の類話として扱ったが、そのために絵姿モチーフをかなり曖昧な形で定義せざるを得ず、その結果、論旨に矛盾を生じてしまったことは否めない。実際問題として、絵姿モチーフは「絵姿女房」において非常に重要なモチーフであるから、それを欠く昔話を「絵姿女房」の類話として扱うこと自体に無理があるのである。

話型に不可欠なモチーフを欠いている昔話を、「モチーフの欠落」を理由にそれを完備した昔話と同様に扱うことがよくある。確かに多くの昔話において一部のモチーフが欠落した形の類話が報告されている。しかし、それらの全てが伝承過程におけるモチーフの欠落によるものと考えてしまって良いのであろうか。

「絵姿女房（難題女房型）」の場合、報告された類話の半分近くが絵姿モチーフを欠くのは数の上であまりにも多すぎるし、それは、同じ「絵姿女房」でも、「桃売型」の方が、報告されている八十数話のうちの三話（二話者）しか絵姿モチーフを欠いていないこととは対照的なのである。もし、絵姿モチーフが簡単に欠落するような性格のものであるのなら、「桃売型」のそれにも数多くの「絵姿モチーフ欠落型」の類話がなくてはならない。が、それがないのは、「絵姿女房（桃売型）」という昔話にとって絵姿モチーフが非常に重要なモチーフだからであり、絵姿モチーフが簡単に欠落したりしないモチーフであることの証でもある。

つまり、モチーフの重要性や類話数の多さから言っても、絵姿モチーフが欠落した形の「絵姿女房（難題女房型）」の昔話を、単に絵姿モチーフが伝承過程においてなくなった類話と考えることはできないのである。それよりも「その昔話は本来的に絵姿モチーフを欠いた話型の昔話である」と考えた方が、話型理解の上で無理がないのである。そして、形の上では絵姿モチーフを欠いた「絵姿女房（難題女房型）」のように見えるそれらの昔話、しかし「絵姿女房」という話型の定義からはどうしても外れてしまうその型の昔話は、新しい話型の設定なしには昔話の体系の中に組み込むことができない。

そこで、本稿では、絵姿モチーフのない「絵姿女房（難題女房型）」の昔話を体系的に整理するために、新しい話型を設定しておきたい。その話型は、「絵姿女房（難題女房型）」と全く同じ展開を見せながら、絵姿モチーフだけを欠くわけであるから、本稿の最初に挙げた「難題女房譚」という話群共通の展開そのものであると言える。難題女房譚共通の展開を持つこと、『大成』自身が「難題女房」という名称をサブ・タイプとして用いていることなどを考え合わせると、この話型は「難題女房」と命名するのが至当と思われる。つまり、先の例話は「難題女房」の類話であるということになる。そして、この話型の昔話は、「絵姿女房（難題女房型）」（特に断らない限り以下この話型を「絵姿女房」と称す）「竜宮女房」「笛吹聟」

などと同様に難題女房譚の一つとして位置付けられるのである。

では、難題女房譚に属する「絵姿女房」「竜宮女房」「笛吹聟」「観音女房」「難題女房」の五つの話型の昔話にとって、絵姿モチーフはどのような意味を持っているのだろうか。

「絵姿女房」の場合、絵姿モチーフはあって当然であり、なければ話型の定義から外れることになる。本稿で「難題女房」という話型を設定したのはまさにそのためであった。しかし、「竜宮女房」「笛吹聟」「観音女房」の場合は逆に絵姿モチーフを持っていない類話がほとんどであり、絵姿モチーフを持っている類話は一般に「絵姿女房型」というサブ・タイプを付して識別されている。つまり、「絵姿女房」なら絵姿モチーフがない類話の扱いが問題となり、その他の話型では絵姿モチーフのある類話の扱いが問題となるのである。本稿では、絵姿モチーフを欠く「絵姿女房」は「難題女房」という別の話型として取り扱うのだから、結局、難題女房譚という話群の中にあって、「絵姿女房」を除く四話型は全て基本的には「評判による殿様の横恋慕」によって展開しているということになるのである。

## 二

それでは、横恋慕の契機が「絵」である「絵姿女房」と、「評判」であるその他の話型とでは、絵姿モチーフ以外の展開においてどのような違いがあるのだろうか。それを明らかにするために、難題女房譚に属する五つの話型の展開を簡略化して、示しておきたい（表1）。

「絵姿女房」の場合、男が女の来る前に何か特別なことをするということはほとんどない。女房は何の理由もなしに男の許に押し掛けて来るのである。その点は、先の例話に見られるように「難題女房」でも同じである。しかし、その後で非常に印象的な絵姿モチーフへと展開する点が「絵姿女房」の特徴である。

それに対して「難題女房」は、「評判」が殿様の横恋慕の契機となる点で「竜宮女房」「観音女房」「笛吹聟」と同じであり、また発端部と結末部（結末も例話に見られるように、殿様が男に謝るだけで、致富をさえ語らずに終わるものが多い）で「絵姿女房」と同じであった。つまり、難題女房譚の他の話型と比較した場合、「難題女房」にはその話型にしかない全く独自な展開というものが何も存

**表1**

| 話型 | 独自の発端部 | 難題女房譚としての展開部 | | | 独自の展開部 | 結末部 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 押掛女房 | 絵姿 | 難題 | | 致富 | 別離 |
| 絵姿女房 | なし | ○ | ○ | ○ | なし | △ | × |
| 難題女房 | なし | ○ | × | ○ | なし | △ | × |
| 竜宮女房 | 竜宮への供物 | ○ | × | ○ | 殿様の死 | ○ | ○ |
| 観音女房 | 母親への孝養 | ○ | × | ○ | 殿様の死 | ○ | ○ |
| 笛吹聟 | 笛を吹く | ○ | × | ○ | 女房の奪還 | △ | × |

在しないのである。逆説的な言い方が許されるならば、全く独自性のない展開をすることが「難題女房」の独自性なのである。

「竜宮女房」は、発端部の、売れ残りの柴や門松を水中に投じる点に独自性が見出せる。その後、竜宮入りしてそこで美女を嫁にもらう類話もあるが、そうではなくて、竜宮の女が女房になりに押し掛けて来るという形を採る類話の方が多い。殿様に課せられた難題を解決する中で、殿様が死んでしまって、男が代わって殿様になるという展開が多いのも「竜宮女房」の特徴の一つである。一つ一つの昔話が自己完結していると考えるならば、結末部の致富は、発端で男が投げ込んだ柴や門松などの供物に対する竜宮からの返礼と捉えることができる。

「観音女房」は、年老い病んだ母親に献身的に仕える息子の孝心に感じた観音が、母親の死の直後に押し掛け女房にやって来るというものであって、発端部に独自性が見出せる。

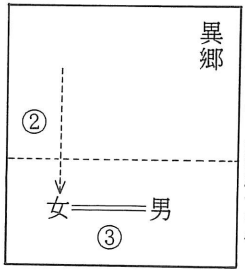
また、「竜宮女房」と「観音女房」は夫婦の別離を語るものが他の話型より多い。それは、「観音女房」の多くが「竜宮女房」と複合していることとも無関係ではないが、難題解決の時にも何かと竜宮の援助を受ける「竜宮女房」の女房と、その正体が観音であるという「観音女房」の女房が、他の昔話の異類女房たちよりも異郷性・神聖性を濃く残していることに由来すると言えよう。

「笛吹聟」は、天界にまで聞こえてきた笛の音を愛でた天女が、笛吹き名人の男の許へ押し掛けて来るという発端部を持っているが、難題を解決するために赴いた天上で逃がしてしまった鬼に女房を奪われるものの、それを得意の笛の力によって無事取り戻すという結末部も、かなり膨らんでいて、他に類のない展開を示している。

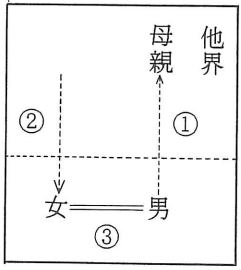
以上、各話型の独自性について述べてきたが、次にそれらの話型の発端部における構造的な共通性を簡単な図にして示しておきたい。

「竜宮女房」「観音女房」「笛吹聟」の三話型の発端は、基本的には

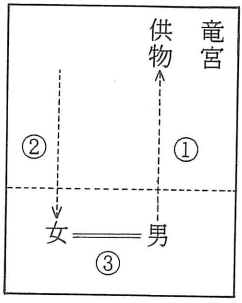
絵姿女房・難題女房



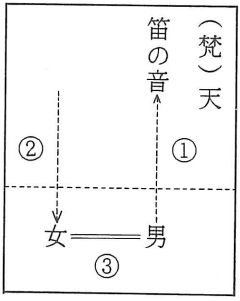

観音女房




竜宮女房




笛吹聟




① 異郷への働きかけ
② 美女の来訪
③ 婚姻

②③ 押し掛け女房

「難題女房」「絵姿女房」と同じ構造（②③）を持ちながら、「難題女房」や「絵姿女房」にはない「異郷への働きかけ」（①）という展開を有している。「竜宮女房」では供物が竜宮に投げ込まれ、「観音女房」では母親が聖地で死んで他界へ送られ、「笛吹聟」では妙なる笛の音が天に届いて、その代わりにそれぞれの異郷から押し掛け女房が来るのである。「押し掛け女房」（②③）は難題女房譚全てに共通するものであるから、難題女房譚という話群の中にあって、それぞれの昔話がそれぞれ一つの話型として成立しているのは、発端部の「異郷への働きかけ」の有無とその働きかけ方の違いによるものと考えられる。

そして、「竜宮女房」「観音女房」「笛吹聟」では、それぞれ発端部に対応する形で結末部が展開している。つまり、竜宮から来た女房は結局竜宮に戻って行くし、観音はやがてその正体を顕わして去る。笛の力で天女を女房にした男は、鬼にさらわれた女房を奪還するにも笛の力を借りるのである。これらの昔話では、発端と結末とがお互いに関連し合って閉鎖的に一つの昔話を構成していると言える。

このように、一つの閉ざされた昔話世界を構築しようと働く発端部と結末部にはさまれて機能しているのが、「押し掛け女房」「殿様の横恋慕」「難題とその解渉決」などのモチーフによって構成された、話群共通の展開部なのである。

## 三

自己完結的な独自の展開を持つことによって一つの話型たり得ている「竜宮女房」「観音女房」「笛吹聟」と違い、「絵姿女房」と「難題女房」はともに発端部や結末部に特別な展開がなく、両者の違いは単に展開部における絵姿モチーフの有無だけである。しかし、同一の展開を有する二つの昔話における絵姿モチーフの有無の問題は、実は所謂「絵姿女房（難題女房型）」の話型を再検討させる重大な問題を孕んでいるのである。

先に、難題女房譚の中で絵姿モチーフを持っている話型は「絵姿女房」だけだと指摘した。しかし、実際には「竜宮女房」の中にも絵姿モチーフを持っている類話はあって、それらは一般に「竜宮女房（絵姿女房型）」として理解されている。「竜宮女房」と「竜宮女房（絵姿女房型）」との間に絵姿モチーフ以外に展開上の違いがないことは言うまでもない。昔話によって絵姿モチーフに対する取り扱いが違うということはあり得ないのだから、どんな話型の昔話であっても、基本的な展開が同じであれば、絵姿モチーフを伴う類話を「絵姿女房型」というサブ・タイプを付すことによって識別するのは当然のことである。そして、それは「難題女房」についても同様のはずである。

とすると、基本的な展開が「難題女房」と同じであって絵姿モチーフを有する昔話は、「難題女房（絵姿女房型）」（ここでいう「絵姿女房」とは「桃売型」のそれを指す。以下「絵姿女房型」とあれ

ば同じ）として理解しなければならないことになる。つまり、所謂「絵姿女房（難題女房型）」は、「絵姿女房」でなく「難題女房（絵姿女房型）」という話型なのである。

そのことを明確にするために、いま一つ表を提示しよう（表2）。

表2で明らかなように、AとBの昔話についての本稿での話型理解は従来のものと同じであるが、CとDについての理解はかなり違うものとなった。中でもDは、従来「絵姿女房（難題女房型）」と考えられていたが、新しい案では「難題女房（絵姿女房型）」と、話型（タイプ）とサブ・タイプの扱いが全く逆になっている。しかし、「難題女房」という話型を設定して体系化することによって初めて、Cの話を「絵姿女房」と呼ぶべきかどうかという問題や、Bの「竜宮女房（絵姿女房型）」などと比較した時のDの表記のズレの問題などが解消するのである。

**表2**

| | 発端部 | 難題女房譚としての展開部 | | | 結末部 | 従来の分類 | 新しい分類案 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 押掛女房 | 絵姿 | 難題 | 致富 | | |
| A | 供物 | ○ | × | ○ | ○ | 竜宮女房 | 竜宮女房 |
| B | 供物 | ○ | ○ | ○ | ○ | 竜宮女房（絵姿女房型） | 竜宮女房（絵姿女房型） |
| C | なし | ○ | × | ○ | △ | 絵姿女房（難題女房型）？ | 難題女房 |
| D | なし | ○ | ○ | ○ | △ | 絵姿女房（難題女房型） | 難題女房（絵姿女房型） |

もともと昔話の話型というものは、独自な「モチーフの連続」によって設定されるべきであり、よほどの独自性を有したモチーフでない限りは、たった一つのモチーフと存在によって設定すべきではない。従来「絵姿モチーフ」は、その印象的な展開ゆえに、そのモチーフを持つもの全てが「絵姿女房」という昔話であるかのように扱われてきた。『名彙』『大成』『通観』しかり、稿者の前稿もしかりである。しかし、もうそろそろ「絵姿モチーフ」重視から、「モチーフの連続の独自性」重視へと、視野を広げなければなるまい。

絵姿モチーフを契機に殿様に女房を掠奪され、殿様との衣装交換によって結末を迎えるという「絵姿女房（桃売型）」の展開（モチーフの連続）は、他のどの昔話にも見られない全く独自のものである。そして、その緊密な展開の中にある絵姿モチーフを（先に指摘したように）類話のほとんど全てが持っているということは、この昔話が一つの話型としていかに安定して語られているかを物語っている。

それに対して「難題女房型」は、難題女房譚中にあって絵姿モチーフ以外に独自な展開はなく、また、その肝心のモチーフがないものを類話中に多く含み込んでいた。しかし、これは、「語り」が絵姿モチーフの有無の間で揺れているのではなく、話型としての位置付けが安定していなかったことによるのである。

つまり、真に「絵姿女房」と呼ぶべき昔話は唯一「桃売型」の昔話だけなのであり（ということは「桃売型」などというサブ・タイ

プを付す必要もなくなり）、一方の所謂「絵姿女房（難題女房型）」は、話型としては「絵姿女房」ではなく「難題女房」であり、その「絵姿女房型」として把握すべきだということなのである。

## 四

所謂「絵姿女房（難題女房型）」を「絵姿女房（桃売型）」と同例に捉えてはならないということは、この昔話が「絵姿女房」として整理されたために、『大成』『通観』において配列上正しく位置付けられていない[6]ということからも明らかである。

『大成』において「竜宮女房」「笛吹聟」などの難題女房譚は「婚姻・異類女房」に配列されている。それは、そこに登場する女房が竜宮の女であり、天女でありするから当然のことである。ところが、今問題としている所謂「絵姿女房（難題女房型）」は、その女房が異類女房であり、展開面でも基本的には他の難題女房譚と同じであるにも関わらず、「婚姻。異類女房」でなく「婚姻・難題聟」に配列されている。「婚姻・難題聟」には、先の「絵姿女房（桃売型）」や「播磨糸長」「山田白滝」など、「難題」解決の末に男が「聟」になるという内容の、人間同士の婚姻を説く昔話が配列されているのであるから、それらの話群内にあって所謂「絵姿女房（難題女房型）」だけが異類婚姻を説くのはおかしいのである。

『大成』と全く逆の配慮をしたのが『通観』である。そのタイプ・インデックスでは「Ⅸ婚姻〈異類女房〉」の中に217A「絵姿女房（難題型）」と217B「絵姿女房（物売り型）」が並べて登録してある。しかし、「絵姿モチーフ（物売り型）」は異類婚姻譚ではないのだから、〈異類女房〉に入れるのはおかしいのである。

つまり、両者は、位置付けは逆ではあるが、共に絵姿モチーフを持つという理由で「難題女房型」と「桃売型」とを並べたという点で同じ誤りを犯したのである。「難題女房型」は異類女房との婚姻譚であり、「桃売型」は「知恵の働き」による「幸福なる婚姻」の成就・継続を説く昔話なのであるから、共に絵姿モチーフを持つというなどというモチーフレベルの一致に拘泥せず、主題重視の姿勢で配列すべきだったのである。そうしなかったのは、絵姿モチーフを重要視しすぎたからである。

厳密に考えれば、「絵姿女房」は「桃売型」のそれだけであり、「難題女房型」のそれは「難題女房」という新話型に内包される。そして、前者が「婚姻・難題聟」（『通観』では「婚姻の成就」）に、後者が「婚姻・異類女房」に配列されて初めて、「絵姿女房（桃売型）」も、所謂「絵姿女房（難題女房型）」稿者のいう「難題女房（絵姿女房型）」も正しく認識されるのである。

## 五

本稿で論じてきた「難題女房」という話型の昔話は、押し掛け女房に来た理由や、難題解決後の展開をあまり語らない。唐突に始まりあっけなく終わる「難題女房」は、その展開が単純すぎて、今までは消極的にしか理解されていなかった。「難題女房（絵姿女房型）」が長い間「絵姿女房（難題女房型）」として認識されてきたの

が、その証左である。しかし、それは、厳密な話型認識に従えば、他の難題女房譚と同様に「婚姻・異類女房」に配列されるべきものであり、展開上、他の難題女房譚の基本型とも言えるものである。

ただし、ここで注意しておきたいのは、「難題女房」は確かに他の難題女房譚の基本型ではあるが、それは各話型に内在している元型（アーキ・タイプ）[7]だということである。本稿における「難題女房」の設定、およびそれに伴う「絵姿女房（難題女房型）」という話型の否定は、あくまで共時的・便宜的な分類上の試案なのであって、通時的な昔話形成の問題とは無関係である。本稿で、難題女房譚の形成について言及したつもりはない。

最も単純な展開の「難題女房」があり、「殿様の横恋慕」の契機が「絵」である「難題女房（絵姿女房型）」がある。「難題女房」の発端のさらに前に独自の発端を持ち、それに対応する形で独自な結末を持っている「竜宮女房」「観音女房」「笛吹聟」などがある。それらは全て、昔話伝承の場において共存しているのである。

「竜宮女房」「観音女房」「笛吹聟」などの昔話は、「難題女房」を元型としながら、それぞれ独自の展開を持つことによって別の話型の昔話たり得ている。所謂「絵姿女房（難題女房型）」は、絵姿モチーフを有する「難題女房」なのであり、「難題女房（絵姿女房型）」と見なすべきである。これらの昔話は全て、基本的には同じ展開を内包しているから、その元型である「難題女房」の名を援用して、「難題女房譚」として包括的に捉えることができる。

## 注

（1）この話型の、関敬吾氏『日本昔話大成』での表記は「絵姿女房・難題女房型」であるが、本稿では、話型とサブ・タイプとの区別を明確にする必要があるため、サブ・タイプに相当する部分を（　）に入れて表記した。

（2）拙稿「『観音女房』の伝承」（『奄美沖縄民間文芸研究』第八号、昭和六十年七月）、および「昔話『観音女房』と中国孝子譚」（『伝承文学研究』第三十四号、昭和六十二年七月）。

（3）拙稿「『絵姿女房』の展開」（『昔話と世間話、昔話――研究と資料――』第一四号、昔話研究懇話会、昭和六十年十二月）

（4）遠野民話同好会編『遠野の昔話』（日本放送出版協会、昭和五十年）

（5）注（3）に同じ。以下「前稿」とあれば、注（3）の論文を指す。

（6）『名彙』では「幸福なる婚姻」に入れられており、本稿の問題に抵触しないので論じない。

（7）ここで殊更に「元型（アーキ・タイプ）」の呼称を用いたのは、C・G・ユングおよびその学派の深層心理学者のいうところの「元型」を意識してのことである。非常に単純で基本的な話型である「難題女房」は、アニマ・シャドウなど人間の深層心理と関わっているように思われる。

（みうら・しゅんすけ／立命館大学研究生）